暁鐘の音 51

幸福三説

誰しも幸福になりたい、幸運に巡り合いたいと思う。そう思って周りを見渡すと、どうも幸運は全ての人に満遍なく行き渡るものではなく、片寄っているように見える。運の巡ってこない人は、何時まで経っても運が回ってこない。焦って無理すればするほど、失敗を重ねてしまう人がいる。幸田露半はどうもこの辺が気になったのか、幸福について面白い考えを披露してくれている。

露伴に幸福三説と言うのがある。すなわち「惜福」「分福」「植福」がそれである。つまり、幸運を次々と呼び込む人は、この三つの福を実現、または実行していると言うのである。

♥♡♥♡

初めに「惜福」とは、自分に回ってきた福を一度に使ってしまわないこと。分かりやすくいえば〈ちびりちびり〉使いなさいということです。こういえばまるでケチの権化のようですが、そうではありません。例えば新しい洋服を買ってもらったとします。そのとき、前の服をさっさと捨ててしまうのではなく、まだ着れるので新しいのは外出用にして、普段はこれまでの服で済ます。これが惜福です。確かに今日ではこんな考えは“はやらない”かもしれません。第一、そこまで着られたのではリサイクルに出せません。でも考えようによっては、上手にリサイクルに出すことも、ある意味では今日的な惜福の形かも知れません。要は使い捨てで次々と取り替えるのではなく、それぞれのものの寿命を全うしてやることです。

♥♡♥♡

つぎに「分福」とは、自分が手に入れた福を、独り占めしないで周囲の人に分けることです。田舎から果物が送られてきた。量が多いと痛んでしまうので、近所に分ける。潮干狩や釣りで沢山の獲物を得たときも、周りに分ける。大金を拾ったり高額の宝くじに当たったときも、独り占めしないで一部をどこかに寄付をする。こればっかりは独り占めすると恨まれる。実際、これまで貧しくとも平穏な暮らしをしていた人が、一億という額のお金を拾い、落とし主が現れずに自分のものになったため、その後の人生を狂わせてしまった人がいます。かと言って変な分け方をすると却って災いをもたらすこともあります。競馬も同じで、最近も二〇数万倍という当たり券が出たようです。もし一万円で買えば何と二千万円です。これをどう使うかは易しくないかも知れません。もっとも、これは当たらない者のひがみかも知れませんが。

地元で名家として代々続いている家なんかも、結構周りに気を配って分福している例もあります。逆に代が替わってそのような気配りをやらなくなったと思ったら、一〇年も経たないうちに身上を傾けてしまう例もあります。

このほか露伴に言わせれば、会社に於いて地位に伴って得た収入も分福の対象だそうです。そう言えば昔の上司は気前のいい人が多かったように思う。私もだいぶその恩恵にあずかった口です。自分が若い頃分福にあずかったのだから、今度は立場を替えて次の世代に対して分けるというのも分福なのです。

♥♡♥♡

三つ目の「植福」とは、手にいれた福を自分が使うのではなく、形を変えて後代のために蓄えておきなさいということです。昔は、子供が生まれたら裏山に杉や桧の苗を植えたり、特に女の子だったら桐の苗木を植えたりした（ちょっと古いですかね）のも、自分が利益を得るためではなく飽くまでも後代のためで、これが植福の原形です。ただ今日では杉や桧の苗木を植えるような土地はありませんし、「子孫に美田を残さず」という例もあり、何を残すかは難しい問題です。やはり最高なのは、社会のため、人のためにひと働きしておくことでしょうか。自分がいなくなった後で子供が苦境に陥ったとき、その人の親に世話になったという人が現れたりして、九死に一生を得ることがあるかも知れません。これぞまさに最高の「植福」と言えるでしょう。

♥♡♥♡

元来「幸福」は予期しないものです。渡部昇一氏によると、happyの語源がhappenと共通しており、また日本語でも「幸せ」のもとは「仕合せ」すなわち出来事なのだそうです。こうなると、happyを「仕合せ＝幸せ」と訳した先人の叡知が忍ばれます。

こうして「幸せ」を得た時に、惜福、分福、植福をうまく使いこなした人には、引き続き幸福がやって来るというのが、露伴の幸福三説です。■

花

花には
散ったあとの
悲しみはない
ただ一途に咲いた
喜びだけが残るのだ

（坂村真民）

今月の一言・今月の一言・今月の一言・